

昭和53年3月31日

73 週刊朝日

(1978)

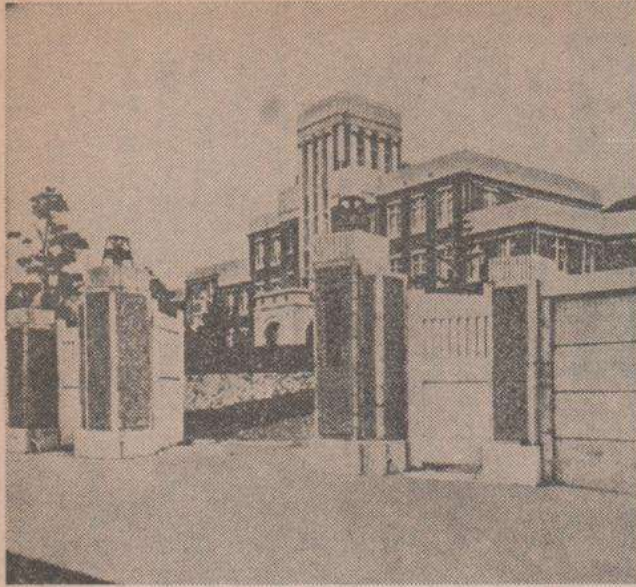
連載「学歴日本」の深層研究

現代に脈打つ 旧制 （高校・高専） （大学・予科）



甲南高等学校

I



青春風土記

甲南ルート

三國一朗

「成城」や「成蹊」には、それぞ
れ尤もらしい命名の由来があった
が、「甲南」にはそれらしいもの
がない。

要するに「六甲」の「南」という
ことで、明治の終わりのころから、
この辺のことを、誰いうとなく
「甲南」と呼んでいた。それが、
そのまま「すんなり」と学園の名
になったにすぎない。

どこの学校でも、創設、運営に
苦労はつきものだが、この学校に
は、それを大げさに表に出した
り、肩をいかせて見せたりする
ところが感じられなくて、いまま
で東京の七年制高校ばかり見てき
た私には、やや拍子ぬけではあっ
たが、ますます気楽なのは大助か
りであった。

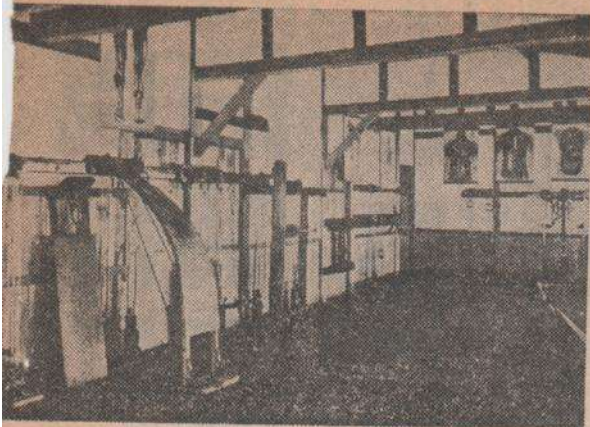
いまはマンションが建って跡形

もないが、昔は有名な梅林があつ
た。司馬江漢が長崎からの帰途立
ち寄って詩に詠じたという「岡本
の梅林」である。学校が建つてか
ら、名代の當もちの茶店があ
り、シーズンには梅見客がぞろぞ
ろ歩く。太鼓をもちこんで浮かれ
ている声が授業の邪魔をしたとい
う思い出話もある土地柄だから、
空つ風の武蔵野とは趣がかなりち
がうのである。

その土地柄に最初に目をつけた
のが、関西とくに大阪の富裕な商
人であった。商業地域の拡充で、
商家の「居住性」が悪化するのを
憂えていた彼等は、明治の四十年
前後から、大阪と神戸の間の住吉
村あたりに居を移しはじめた。気
候温和で景色もよく、空気の澄ん
だ健康地、それに大阪への往復も

ますますの便である。大阪の住居
を売却した金で立派な家が建ち、
税金を払って、しかもおつりが
来る。南才に長けた合理主義者た
ちは、つぎつぎと「甲南」に住む
ようになった。

平生銀三郎も、その一人であつ
た。平生は慶応二年、いまの岐阜
市加納に生まれた没落士族の三男
坊。父親は元加納藩士で、文字通
り傘（加納の特産）の骨を削って
十人の子を育てた。銀三郎は成績
がよく岐阜中学に入ったが、五十
銭の月謝に事欠き、東京外国語学
校の給費生になる。「二葉亭四迷」
の長谷川辰之助とは、ロシア語
科の同期生だった。あと一年で卒
業というとき、学校が東京商業学
校に合併、ロシア語科学生は除籍
ときまる。長谷川はこれを機に作



室具矯正身体がこれ

平生は東京海上火災保険株式会社に明治二十七年から大正十四年までいて、常務取締役を最後に辞任するが、彼と名コンビを唱われた各務謙吉が生誕の財界人であったのに対し、平生自身は、むしろ

養育のため三人目の妻すず夫人を迎えたが、それを機に縁起の悪い大阪の家を見はなし、阪神間の住吉村に転居した。間もなく彼は同じ住吉に住む弘世助太郎（日本生命の創立者）から、小学校をつくる相談を受ける。ぞくぞくと移住して来る「財界人」や土地の有志たちが、そろそろ「子女の教育」に気をつかいはじめていたのである。平生弘三郎は喜んで弘世に

まず人格をつくれ、身体を丈夫にし、知識偏重であつてはならぬ、この三点を平生は終始強調し、その手段として個性の尊重、少数教育の二つを主張したようである。普通は知育、徳育、体育というところを、彼は知育を最後にまわして、「徳、体、知」をいつも「お題目」にした。勉強はできるにこしたことはないが、半病人やカンニングをする人間を作つてはならぬということで、スポーツは無敵奨励したが、校内に「身体矯正器具室」という、一見何に使ったか想像もつかないような怪奇なスポーツ・マシンを集めた一室

まで設けた。昨年の十一月、アマ・テニスの日本一を決める第五十二回全日本テニス選手権大会が大阪で開かれたが、その第一日の一般男子シングルで元テニス選手の田辺正（日本薬機）が、日本学生チャンピオンの中西に逆転負けし、新聞に写真入りで報道された。この中西選手が甲南大である。テニスも甲南が誇る伝統あるスポーツの一つで、なにぶん父兄に金持ちが多く、自家用テニスコート的一面や二面はさらにあつたという事情もプラスしているのは事実である。金のかかるスポーツに強かった別

家になったが、弘三郎は東京商業学校の正規の課程に再入学、経済界で身を立てようと決心した。しかし、すぐ学費に困る。もう給費制度はなかったからだ。折よく平生家から養子の話があり、仕送りを受けながら二十四歳でめでたく卒業。その年、明治二十三年に平生のひとり娘佳子と結婚し、それまでの田中姓から平生姓になった。

その平生の家庭に不幸があいついで起きなかつたら、彼と「甲南」との結びつきは実現しなかつたかもしれない。佳子夫人は二男三女をのこして病死、つぎの借校夫人も一女を生んで病死する。打撃を受けた平生は、多くの子女の

協力を約束した。では、平生本人の「教育的・社会的抱負」とはどんなものだったか。甲南学園の設立にあたり、平生の手足になつて働いた一人の伊藤忠兵衛（平生の死後、学園理事長）は、独特のカナモジと漢字からなる「わかし書き」文で書いて

ト、ヨク キカレルガ、ソレハナンニモ ナイ。ツマリ、ヨキカラダ、ヨキ考エ、少シデモ、世ノ中ニ、ツクシウル人間ニ、ソダツテ、モライタイシ、制度上、デハ、画一的ナ、教育ヲサケ、個々ノ人間ノ、才能ヲ、ノバシウル教育ヲ、ツツケタイ。コレダケ、ナノデアル。真ニ、コノ精神デ、イケト、イワレルカラ、コレハ、アトヲ、ツグモノニハ、カナリ、苦シイ、オ題目ダ。」

人格は強健なる身体の上にあり

の例は「登山」である。大正十二年、香月慶太（当時尋常科二年生）の提案で発足した「遠足部」は、のち「山岳部」と改称、山口金治（文1、商信興業監査役）、磯田辰男（文2、甲南学園理事會参与）らの創設期を経て、当時日本に輸入されたばかりのビッケル、ザイル、登山靴その他の近代装備を備えた「科学的登山」を採用、伊藤忠（文4、故人）、檀淳（理4、故人）、西村格也（文4、流氷書房社長）、香月慶太（文5、須藤リプトン関西工場常務取締役）らによって昭和のはじめに全盛期に達し、日本登山界のバイオニアとつた。甲南山岳部が開拓したルートは「甲南ルート」と呼ばれ記録に残つており、井上靖の「氷壁」に現れる前穂高岳奥又白側岩壁や滝谷の岩壁は、どれも甲南高校の山男がひらいたものである。親の金で「近代的装備」をほとんど買いこむのだから、他の学校からはずいぶんうらやましがられたものである。「金持ちの親」を強調しすぎたきらいがあるが、進藤次郎（文1、株式会社大広社長）は、「金持ち」の子でありながら、金のかからないスポーツで名を挙げた一人である。二代目の丸山校長就任直後の

大正十三年七月二十七日、東大運動場で全国高等学校リレー大会が挙行された。甲南高も出場を申し込んだが、主催者東大側はまだ新しい「七年制」を知らず、参加資格なしと通告してきたので、この

甲南高小史

この旧制高校は、積み上げ方式でできた学校である。まず幼稚園ができ、小学校ができ、中学ができ、戦後はさらに新制大学ができて、「学園」の夢が完成実現というプロセス。現在、甲南小学校は、「甲南学園甲南小学校」、中学・高校・大学は「甲南学園」という別個の学校法人になっている。

住吉村宇反高林の村有地を借りて敷地とし、一万円余りで明治四十四年に幼稚園、四十五年に小学校が、まず開園した。理事長は田辺貞吉、平生飢三郎は理事の一人であった。当時は園児七十人、小学校の入学者十二人。近くの本山村野寄に本邸のあった久原房之助は、大正三年にはじまった第一次大戦で巨利を博し、さらに事業拡大中で、

次郎、柏原方勝（理1、足利工大教授）、高柳常雄（文2、富士日本モーター工業代表取締役）、山中（土居）弘雄（文1、故人）らのメンバーが、四百メートルリレー決勝に優勝。しょんぼり応援にきていた平生は、腕を振り上げて狂喜し、内ポケットから百円札を抜き出して「選手たちに腹いっぱい食べさせてくれたまえ」と上林教諭に手渡したというが、選手の中にはその時はじめて百円札を見たのもいたくらいで、その百円を使い切るのに苦労したという話がある。

進藤次郎も、平生の長男と同じく中学は東京の成蹊に学んだ一人である。大正十二年に卒業し、里帰りのように、七年制高校に昇格したばかりの甲南高校に進学した。成蹊中学時代は中村繁や曾宮一念など新しい感覚の画家による盛んな図画教育の影響で画家への志望に燃えていたが、ちょうどその時期から全国の学校に実施された「色盲検査」で「弱力色盲」と判定され、画の道をあきらめる。甲南高校から京都帝大に進み、昭和四年卒業して一時日立製作所に勤めるが、昭和六年朝日新聞社会部記者になり、役員を経て退社し、広告業界に入った。

PR

十人十色

十人いれば姿形が違うように、それぞれ好み、性格など人により違うこと。類語としては十人十腹、頭が違えば心も違う、十人寄れば十国の者。米も人により食べ方も文字通り十人十色だが、できるだけ豊かな食べ方が望ましい。

漬物にお茶漬で食べても、また油っこいピフテキとても実においしいごはん。食べ方は、文字通り十人十色です。

御飯語録

には変わりありませんが、ごはんとおかずの関係で貧しくなったり、豊かななったり悪くなったりします。ごはんそのものは栄養のベースですが、おかわりはないのですが、おかずとの関係で食事全体の栄養は良くなったり悪くなったりするのです。

貧しいごはんの代表は塩むすびです。おかずを食べながら塩むすびを食べれば、たちまち豊かなごはんになります。漬物でお茶漬けなど実においしいですね。しかし、これもおかずを食べたあとでお茶漬けとなれば、たちまち豊かな食べ方に変わります。

いま、米食推進運動が全国的にはなほしく展開されていますが、豊かなごはんの推進であることはもちろんです。わたしたちのごはん、食べ方は十人十色ですが、一人一人豊かに楽しみたいものです。

宮崎 基嘉代のお話より
（国立栄養研究所基礎栄養部長）

（財）全国米穀配給協会

大阪の堂島小学校を卒業して甲南高校の尋常科に入ったのは大正十四年。新開地時代の梅田にあった彼の家が芦屋に移ったからである。のんびりした芦屋の環境が鉄二の目をおどろかせる。朝、庭に来る白い腹のよくふとった見知らぬ鳥の名をきくと、「雀ですが」と笑われた。やせこけた梅田の雀に慣れた目に、芦屋の雀は小鳩ほどにも見えたのである。

「私の青春期における人格形成は、そこで持たれた極度の個人主義教育やブルジョアジーの環境に、やはり大きく支配されていたのであった」と、武智は「私の芸術・人生・女性」(ノーベル書房)の中に書いている。昭和四年の春、高等科に進んだ彼は、のちのち多大の影響を受ける英語教師香西精を識った。当時甲南高校には、平生理事長が私財五万円を投じて建設し学園に寄附した五百人収容の食堂があり、教師も生徒も共に昼食をとることになっていたが、香西教授は食事をしながら武智らに東京歌舞伎の話をかきせる。「菊・吉」時代の市村座の立ち見の話などに、武智は「血や肉が踊る感じ」がした。香西教授はときに「菊五郎、菊次郎の三千歳の芝居を見たあとで、君はまっす

ぐ下宿へ帰る気になりますか」などと質問して、セックスに未経験な生徒たちを当惑させたりしたが、その時期に香西教授のような人格にめぐりあったことは、武智の人生の方向決定に大きな影響を与えたはずである。香西精は世阿弥の研究者でもあったので、武智は能や狂言にも深く傾倒するが、「単なる歌舞伎通にならずに古典演劇全般を通観する視野を養い得た」のは、ひとえに香西教授のおかげであつたと述懐している。

武智が尋常科のとき、雑誌「甲南」に歌舞伎の形式による創作戯曲を発表して、その早熟ぶりが人々を驚かせたことは有名なが、高等科で机を並べた西台美智雄(文芸、帝塚山学院大教授)は、武智が鼻唄に淨瑠璃のようなものを口ずさむのを、よく聞いたそうである。大阪の四つ橋に文楽座が再建され、三宅周太郎の「文楽の研究」が出版されたのは、ちょうど武智鉄二の甲南高校生時代であつた。

昭和四十二年、寛政祭が日本武道館で行われたとき、甲南高校が生彩を放ったのは、中央舞台を見事に生かした武智演出の功績であつたといわれる。(つづく)

(カッコ内数字は卒業回数、敬称略)

NHK 趣味の園芸

4月号発売中/ 290円+税

愛読者プレゼント実施中
 サツキ12カ月/栽培環境の知識
 樹芸・モクレンの仲間/小品盆栽
 花語り/園芸・ショッピングガイド4月
 庭木の生け垣づくり/園芸相談
 今月おぼえたい栽培テクニク

エビネ 中島暉躬
 エビネ類の特徴/鉢植えの育て方/庭植えの管理/エビネ類のふやし方・栽培ごよみ

庭の下の草 適した植物と利用例 西 良祐
 ニリンソウ/シバザクラ/コヤブラン/他

ゼラニウム 柳 宗民
 ゼラニウムのつくり方・栽培のポイント

すみれとパンジー 浅山英一
 家庭で育てたいスミレ/パンジーの花壇づくり

盆栽・春の手入れ 吉村金一
 1本木の植え替え/寄せ植えの植え替え他



春の増ページ
私の推薦する品種
 エビネ/チューリップ/バラ/他
 一折り込み=4月の園芸作業暦

1月から12月までの作業をオールカラーで
NHK趣味の園芸 作業12か月
 ●各750円+税

サクラ 小笠原亮 最新刊
 既刊…ツバキ・サザンカ/ハナシロユウワノモミジ/大ギク/サボテンノカドリアノサンビジュウム/エビスノ日本サクラソウ/バラ/ウメ/サツキ/ゼラニウム・ペラルゴニウム/ツツシ/ジャコウタケ/タケササ/ブドウ/ユリ…好評発売中